

り、たびたび太陽の方にあたまをさげました。それからじぶんのところに戻るやびたりととまつてうたひました。

「お日さんを

せながさしよへば はんの木も
くだけで光る

鉄のかんがみ。」

はあと嘉十もこつちでその立派な太陽とはんのきを拝みました。右から三ばん目の鹿は首をせはしくあげたり下げたりしてうたひました。

「お日さんは

はんの木の向き、降りでも

すすぎ、ぎんがきが

まぶしまんぶし。」

ほんたうにすすきはみんな、まつ白な火のやうに燃えたのです。

「ぎんがきがの

すすぎの中さ立ちあがる

はんの木のすねの

長んがい、かげぼふし。」

五番目の鹿がひくく首を垂れて、もうつぶやくやうにうたひだしてゐました。

「ぎんがきがの

すすぎの底の日暮れかだ

苔の野はらを

蟻も行がず。」

このとき鹿はみな首を垂れてゐましたが、六番目がにはかに首をりんとあげてうたひました。

「ぎんがきがの

すすぎの底でそつこりと

咲ぐうめばちの

愛どしおえどし。」

鹿はそれからみんな、みじかく笛のやうに鳴いてはねあがり、はげしくはげしくまはりました。

北から冷たい風が来て、ひゆうと鳴り、はんの木はほんたうに砕けた鉄の鏡のやうにかゞやき、かちんかちんと葉と葉がすれあつて音をたてたやうにさへおもはれ、すすぎの穂までが鹿にまじつて一しよにぐるぐるめぐつてゐるやうに見えました。

嘉十はもうまつたくじぶんと鹿とのちがひを忘れて、

「ホウ、やれ、やれい。」と叫びながらすすぎのかげから飛び出しました。

鹿はおどろいて一度に竿のやうに立ちあがり、それからはやてに吹かれた木の葉のやうに、からだを斜めにして逃げ出しました。銀のすすぎの波をわけ、かゞやく夕陽の流れをみだしてはるかにはるかに遁げて行き、そのとほつたあとのすすぎは静かな湖の水脈のやうにいつまでもきらきら光つて居りました。

そこで嘉十はちよつとにが笑ひをしながら、泥のついて穴のあいた手拭をひろつてじぶんもまた西の方へ歩きはじめたのです。

それから、さうさう、苔の野原の夕陽の中で、わたくしはこのはなしをすすきとほつた秋の風から聞いたのです。

宮沢賢治

童話「鹿跡りのはじまり」より